



民主主義への道 15

理事長 千葉忠夫

・ 10年運営した「生活学園」閉園を決意

私はこの仕事をやっていく上でいつも、もし自分の息子がぐれるようなことになれば即座に止めようと思っていた。そのうちTBSの「いきいき地球家族」という番組があり、1週間学園で撮影が行われた。番組の最後にスタッフが息子に聞いた。

「お父さんの仕事を継ぎたいと思いますか？」
「嫌です。継ぎたいと思いません！」さらに娘に聞いた。「お父さんの仕事どう思いますか？」「いろいろな少年たちと会えて面白いと思う」「じゃーお父さんの仕事を継ぎますか？」「私には無理だと思います」

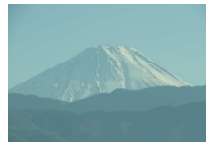
「生活学園」を始めたとき、息子は小学一年生、娘は幼稚園学級に入ろうとしていた。それから10年の間、彼らなりに「生活学園」の日常—自分の子供たちより学園の少年たちにより時間を割いている私—をしっかりと見た上での答えだったろう。子供たちのこの言葉を聞き、そろそろ「生活学園」を止めようと思うに至ったのだった。それは子供のためばかりではない。その頃になると日本からの社会福祉研修生の数が著しく増加したからでもある。



旧・日欧文化交流学院の本館。学院が開設する前は、ここにボーゲンセ生活学園があった。

・ 俳優の穂積隆信さん、体験入園

ある日、穂積隆信という人が訪ねてきた。聞くところによると舞台役者だそうで「積み木くずし」という本を書き、その後全国の親子断絶中の親たちから相談を持ちかけられたそう。個人では対応しきれないので、人をたのみ私設児童相談所を開設した。穂積さんはデンマークでは社会から脱落した少年たちをどのようにしているのか視察に来て、誰かから私のことを聞きつけ、ついでに立



謹賀新年

ち寄った。何かと話が弾んだ後、「私を『生活学園』に1カ月入園させて下さい」ということになり、穂積さんは1カ月入園し、無事卒園？したのだが、彼の在園中に日本の子供たちを連れてヨーロッパをキャンプ旅行し、社会復帰訓練をしたらどうかと話がまとまった。穂積さんの私設児童相談所に相談に来ている子供たち9人を「生活学園」に受け入れることにした。目的は生活訓練をしながらヨーロッパを見聞することであった。

・ 過保護と愛情不足

—日本とデンマーク、グレの違い—

当時「生活学園」には3人の男子と1人の女子のデンマーク人が生活していた。彼らに日本からの9人が加わって最初の1週間が始まった。同じ年齢層の若者たち、同じ社会脱落者たちなのに日本の若者たちには自律心が著しく欠けているのに驚いた。よほど過保護に育てられたのかもしれない。過保護で親子断絶し、グレた日本の若者と、離婚が当たり前で愛情に不足しているデンマーク人の若者との自律心の相違は、離婚前までのデンマーク人の子育てが日本人よりも甘やかさずに育てたからではないか。

最初の晩、一人の日本の女の子がどうしても家（日本）に帰りたいと言い出してきかなかった。仕方がないので私は彼女が未成年なので家に電話をし、親から許可をもらいなさいと言った。親との会話が聞こえてきた

「家に帰エリテインだヨ！テメイ、分からね〜いのかよオ！帰ってイイッテ言えヨ、バカ」

彼女が電話を切った後で私は彼女に尋ねた。

「君、今誰と話したの？」

「ハイ、お母さんです」

私には立派な日本語で答えた。

「エエッ！お母さんと？どうしてあんな乱暴な言葉づかいをするの？」

「アンナヤツ、どうでもいいんです」

「でも親の許可なしで君を日本へ帰すわけにはいかないよ」

彼女はまた家に電話をかけた。

「家に帰りテイッテ言ッテンノまだ分ンねえのか

ヨ、今度家に帰ったらなんでもいうこと聞くからよオ、ゼツタイニ聞くよオ」

親は1カ月なんとか旅行を終えてもらいたいと私に訴えたが、私は親に今娘さんが家に帰りたいと言っているし、何でもいうことを聞くと言っているのだからと渋々承諾させ、急ぎよ帰国の便を手配し帰国させた。

残る8人(女5人、男3人)そして引率者の穂積隆信さん、「生活学園」の4人のデンマーク人と私の家族で構成されるトラブルスクールのつもりがトラブルスクールとして開幕した。

・日本人の生徒たち、最大限の自由を謳歌

—結果は食事抜きのハメに—

生活学園での生活は、デンマーク人の生徒たちとまったく同じように「責任ある自由」をモットーに最大限の自由を与え、責任と義務を果たすよう試みた。幕を開けてみると、なんと日本人の生徒達は“最大限の自由”はこちらが与えなくても十分に日本で習得?していたのであった。

夜遅くまでテレビを見たり、おしゃべりしたりするのは本当に「朝飯前」のことで、最初の日の7時半の朝食には日本の生徒たちは誰一人として起きて来なかった。彼らにいか「自由」と「責任」を関連づけて身につけさせるかが大きな課題であった。最初の日は私が起こしに行かないでデンマークの生徒たちに起こさせた。しかし結果は惨澹たるものであった。後で聞くとなんと朝5時過ぎまでビデオを見ていたらしい。さすがのデンマークの若者たちも、これだけ自由を謳歌?する日本の生徒たちには呆れ返っていたが、これは逆にデンマークの若者により自信を与え、その後のトラブルスクールを実施中の私のよき助手となってくれたのである。

起きて来ないので自分で起きてくるまで放っておくことにした。午後3時ごろになってボツボツ起きて来て、「腹減ったけど飯ないの〜?」。私は無視した。

夕食まではまだ3時間もあるが、その間全員になにも食べ物は与えないことにした。これは決して罰ではなくて自分で取った行動によって起きる結果は自分で責任を取ってもらうということに過ぎない。食事時間は朝食午前7時半、昼食正午、夕食午後6時と事前に知らせてあり、その時間に食堂に来れば食事は用意されているのだ。

「ここでは飯食わせてくれねえの〜?」

「食事の時間に来ればご飯はあるよ」

「寝過ごしてしまったんだよな」「どうして」「ビデオ見てたんす」

「面白かった?」

「ウン、何か食う物ないんすか?」

「夕食までないよ」

「そんな待てねえヨ」

「それならこれからは食事の時間に来ればいい」と無視。

しかし、その日の夕食後もまたまたテレビ室で騒いでいた。今晚もビデオ見ようなどと言っているのである。若者には少なくとも8時間の睡眠が必要だから、「午後11時以降はテレビを見てはいけない」と私。「えエ〜、何時までも見ていって言ったじゃないすか?」「確かに言った。それは翌日ちゃんと起きる者だけだ。あなたたちは誰一人として今朝起きて来なかった。自由だけで責任を果たさなかった。だからその責任を今から果たしてもらおう」

不満たらたらで部屋に帰って行ったが部屋でトランプやろうとか何とか言っているのが聞こえた。

・食事当番、仲間に言われてシブシブ作る

—やっとなんについた「自分の飯は自分で作る」—

なんとか定時に食事を食べさせようとして考えた次の課題は、自分たちで食事を作らせることである。毎日4人(日本人3人、デンマーク人1人)を食事当番にして食べたいものを彼らに決めさせ、材料も自分たちで買いに行くようにと決めた。この日からしばらくの間、私たちは夕食を定刻午後6時には食べられなくなってしまった。

食事当番が決まっても生徒たちはなかなか行動を起こさないのだ。

「腹減ったヨ〜」の音が何度となく聞こえるが無視。私たちだって腹が減っているんだ。しかし腹が減っている生徒たちをさしおいて職員だけが何か食うわけにはいかないのだ。生徒たちが騒ぎはじめた。

「オイ、今日の飯作りは誰だヨウ!」

「おまえとおまえか!早く作れヨウ!」

デンマーク人の生徒は早く作りたくてやきもきしているが、私からの指示で「一人でやるな」と言われているため、ふくれっ面をして日本人の出方を待つのみであった。仲間から早く作れと言われると、職員から言われるより数倍の説得力があるのだ。仲間はずれにされるのが怖いからだ。だらだらしながらも食事が何とかでき上がり夕食にありつけるわけである。

過保護に育ってきた日本の若者にとって飯作りなどは思ってもいなかったようである。しかし、自分たちで作らないと食えないことを身につけさせることが出来た。私にとってはさっさと作ってやれば時間も無駄にならずに楽なのだが、それでは過保護と同じことで進歩がない。

この手記は月刊「権利闘争」(権利問題研究会発行)にて連載されたものです。転載の許可をいただきました関係者の方々に感謝いたします。

10th Weekend Folkehøjskole in Aizuwakamatu の報告

副理事長 茂木俊郎

11月8日から2泊3日で開催された第10回の研修塾について報告します。

今回は会津大学短期大学の久保美由紀准教授を中心に地元の関係者のご尽力をいただき、シンポジウムは同短大部の地域活性化センターとの共催という形で同校の教室を会場にお借りしました。冒頭にご尽力いただいた皆様に感謝を申し上げます。

第1日目は市内のホテル・ニュー・パレスで恒例の他己紹介と、夕食懇親会を開催しました。

翌日は会津大学短大部を会場に、午前中シンポジウムのための準備としてデンマークに関するレクチャーを行ないました。千葉忠夫理事長が「最新デンマーク概要」の説明をし、日欧文化交流学院のOB二宮ゆかりさんが「私の感じたデンマーク」についてお話しし、寺田和弘さん（肩書後述）が「なぜデンマークは世界で最も幸せな国なのか」を説明しました。3人ともパワーポイントを利用して分かり易い話でした。

午後はシンポジウムの本番で、会津大学短期大学部地域活性化センター2019年度公開講座として開催されました。テーマは「幸せな国 日本をつくるために」です。

第1部は千葉忠夫理事長の講演「幸せな国づくり」と質疑でした。

第2部は各シンポジストからの問題提起や意見表明と質疑応答を行いました。



寺田和弘氏（在日本デンマーク王国大使館上席政治経済担当官）

パワーポイントを使って「なぜデンマークは世界で最も幸せな国なのか」を、行政組織、政府と議会、産業・経済、フレキシキュリティ、出生率、育児・教育、医療、介護・年金、税と社会保険、貧困率、国政選挙の投票率、難民・移民の受け入れ、ライフ・バランス、性差別、より包摂的な家族制度、などの観点から解説しました。デンマークは社会・福祉支出が必要な人に届く社会であり（下位20%に支払われる割合が約35%、上位20%には6~7%。日本は約15%、18%と、富裕層の方が優遇されている。）現場に働く人の意見が反映される社会である（企業の取締役の1/3以上は従業員の代表）。結果「ほとんどの人は信頼できる」と考える人の割合がOECD諸国の中でも群を抜いて多く、「警

察は不公平な対応をする」と感じている人の割合が最も低い（10%未満）というデータを知り、筆者は同朋と行政に対する信頼がデンマークの「連帯と共生」を維持していると感じました。



宮森健一朗氏（会津若松市健康福祉部高齢福祉課長）

やはりパワーポイントを使って、「会津若松市のこれからの地域社会とは～地域包括ケアシステムの構築～」と題した報告と提起をしました。

先ず「全国と会津若松市の現状」として長期的な人口推移について国土交通省国土計画局の統計を基に2050年には日本の総人口は3300万人減少、内訳は65歳以上人口が約1200万人増加、生産人口は約3500万人減少、若年人口（14歳以下）が約900万人減少で、高齢化率は40%になる。会津若松市でも2025年の高齢化率は32.3%と予想されている。一方介護認定者数は2000年度の2686人から年々増加の一途をたどり、2018年度は7309人と、2.7倍を超えている。介護給付費も同じ年度で37.4億円から104.6億円、2.8倍近くなり、介護保険料も2666円から6050円に増加した。もはや地方自治体だけで介護費用を負担することは困難になっているのが現状である、としました。

次に「会津若松市の課題と方向性」としては、今後の生産年齢人口の減少、また典型的な地方都市として第1次産業中心の産業構造や少子高齢化、過疎化等の課題先進地であるが、会津大学という情報通信技術（ICT）専門大学が存在し、ICTを使った課題解決に取り組み、全国に展開可能なモデル都市を目指すということでした。

三番目に「会津若松市の高齢者福祉」として、市による現状の把握の様子と、高齢化率を変えることはできないが、今後の取り組みによって介護認定率の上昇を抑え、介護保険料を抑えることはできるかもしれない。要介護認定の基準を厳しくするのは論外で、要介護1以下の軽度な人や要介護認定には至っていない人への支援を充実させる「介護予防の充実」が必要になるという認識が示されました。高齢者を支えるための課題として、①関係機関のネットワーク構築（協力者が不足）②高齢者の社会参画の促進③多様な主体による多様なサービスの提供（慢性的な介護人材不足）が示されました。

地域包括ケアシステムのあるべきイメージと、地域包括ケアシステムは現在でも一定程度構築されつつあるが、もっと支援体制を太く、細やかに、しなやかにしていかなければならないという現状

が語られました。

第四に、ここまでの現状認識と問題提起に基づいた「これからの高齢者福祉と地域社会」の問題提起がありました。

① 元気な高齢者を増やす取り組み（生きがいづくり、居場所づくり、役割づくり、健康づくり、介護予防）を最優先する。②介護サービスと負担、施設サービスと居宅サービス、専門的サービスと住民等によるインフォーマルなサービス、それぞれのバランスのとれた制度設計をする。③多様な担い手、地域の担い手を育成する。④関係機関との情報共有と連携強化を推進する。この4点を基本に据えて高齢者を対象とした地域包括ケアシステムの構築を先行し、その後、障がい者の社会参加やこどもたちの見守りも含めた「地域福祉全体の地域包括ケアシステム」の構築を目指す、ということでした。



久保美由紀氏（会津大学短期大学部幼児教育学科准教授＝学科再編の関係で幼児教育学科になったが専門は社会福祉。）

久保先生の話は「日本は“不幸な国”なのか？」という問いから始まりました。

国連による世界幸福度ランキングで日本は156ヶ国中58位という2012年以降最低の順位に位置付けられたが幸福度の尺度は6つある。

- ① 一人当たりの国内総生産（GDP）24位
- ② 社会的支援の充実（ソーシャルサポート、困ったときに頼ることができる親せきや友人がいるか）50位
- ③ 健康な平均寿命（健康寿命）2位
- ④ 人生の選択の自由度（人生で何をやるかの選択の自由への満足度）64位
- ⑤ 社会的寛容さ（過去1か月の間にチャリティなどに寄付をしたことがあるか）92位
- ⑥ 社会の腐敗度（不満・悲しみ・怒りの少なさ、社会・政府に腐敗が蔓延していないか）73位

これら6つの中には日本ではピンとこない質問も含まれ、それが日本の幸福度を押し下げる要因になっている。例えば⑤、最近ではクラウドファンディングなどの動きも見られるが、日本にはそもそも寄付文化がない。⑥も（「清濁併せ呑む」人を大人物とするように）多少の腐敗は、寧ろ指摘しない方が美德という風潮もある。

そのために国連報告の幸福度など気にするなと言う人もいる。そうだろうか？

「日本は“幸せな国（幸福満足度が高い国）”にはなれないのか？」考えてみよう。

カネ、モノの多さ、所有に価値を置く考え方について暉峻淑子さんは既に1989年の著書『「豊かさ」とは何か』（岩波新書）で、それが本当に豊かなことなのかと問題提起し、2003年の『「豊かさ」の条件』（岩波新書）でも再度提起している。また中根千枝さんは1967年『タテ社会の人間関係』（講談社現代新書）で、日本人の形成している欧米諸国とは違う社会関係構造について、次のように指摘している。“日本人はタテの関係の中でしか自分の位置づけができず、個人として横につながることができない。それでいいのか？”日本の社会が変化する下地は既にできている。

課題として考えられることを私なりに4つ挙げてみる。仕事柄20歳前後の若者たちと付き合いの中で、一つには「生活の標準化による多様性の減少」がある。スマホを持ち常にネットにつながる環境の中に居ることが必要で、多様化とは均質化の中でのわずかな違いに過ぎない。二つ目に人とのつながりが作れず孤立化していく、個人化はするが個人になれない状況が蔓延している。三つ目に、二つの意味でのそうぞう（想像と創造）力が不足している。（水害などの）事態に直面し初めて「まさか自分がこんな……」と言う人が多くて、事前にイメージできない。最後に「きょういくときょうよう」、今日行くところがある、今日用がある、という冗句がありますが、教育、生涯教育という観点での見直しが必要。教養も、ピアノとか何か習い事を身に付けるという意味で良いのだろうか、考える必要がある。

それではどうするのか。何かしらの「正解」を教えてもらえるだろうと期待してくる人が多いが、自分で答えようとするのが最も重要だと思います。



茂木俊郎（NPO日本・デンマーク生活研究所副理事長）

「日欧文化交流学院を支える中間の会」が発足し各地の福祉施設の関係者や日本の福祉の現状に心を痛めている多くの方々からいただいたメッセージや善意の献金を非常に心強く思い、感激した。

一時期ブータン王国が“世界一幸せな国”としてもはやされたことに大きな疑問を持った。それは物質的な欲求をあきらめることで精神の平穩を得る、それを幸せだと思う人は今の日本にはいないだろう。

日本を幸せな国に、というのはデンマークのような優れた社会保障を日本で如何に実現していくのかということだと思うが、先ほどの千葉さんの

講演では、子供の頃から社会性を身に付けさせる教育、民主主義を体得させる教育、教育が非常に重要だということになる。日本でそういう教育ができるのかどうか。

私は千葉県の高校で 36 年間教員をやっていた。今、日教組の組織率と言うのは非常に低い——日教組だけでなく、日本の労働組合の加入率、組織率は非常に低い、その理由は日本の権力者たちが組合は悪だという思想宣伝をずっと続けてきたからだと思う。そういう状況の中で組合に入ら(れ)ない真面目な先生方も大勢いるが、自分でものを考える力、批判力を身に付けさせる教育をしなければいけないというのは組合員の先生方の主張だ。一方で何代か前の、森喜朗(首相)、今のオリンピック組織委員長が総選挙に際して、有権者は眠っていてくれればいいと言った。政府を批判するような人間は邪魔だということ。これで民主主義が育つわけが無い。先ほどデンマークの組合の強さという話があったが、日本で大事に育てられた組合は経営者に積極的に協力しようという組合だ。労働者の権利を守ろうという組合は政府にとって障害、悪だということで片付けられてきた。

皆さん方は組合にどういう考えをお持ちか分からないが、日本では自分の権利を主張することは、悪、である。多くの日本人にとって、それは空気を読むことができない愚か者であり、出る杭は打たれるという言葉もあり、そういう空気の中で育てられた子どもたち、あるいはそういう自分の親を見て育ってきた子どもたち、なかなか難しいだろう。

一方で、やよい軒というレストランチェーンでライスのお替り自由に対して、私はライスをお替りしないのに同じ金を取るとは何事だ、というクレームが付き始め、ライスのお替り自由は止めることになった。他人が自分よりも利益を得る、他人が自分よりも優遇されると感じることに我慢できない日本人が増えてきている。

デンマークでは社会保障の補助器具とかベッドとか、使っていた人が亡くなってそれが不要になると、再生センターできちんと清掃して、整備して次の利用者に使ってもらおう。もし日本で同じことをしたら多分みんな嫌だって言う。このベッドで誰かが亡くなった、そのベッドをうちのお父さん、うちのお母さんに、使わせたくない、私は使いたくないって言う……。或は修理したベッドと新品のベッドがあって、ある人には修理したものが行く、ある人には新品がいく、その時に差別だと騒ぎ立てる日本人が多いだろうと思う。

先ほど社会や政治の腐敗率という話もあったが、日本の政治家が、一絡げにして言うのは申し訳ないが、国会に居る政治家がクリーンな政治を行っていると感じている日本人はいないのではないかな。支持者は問題ないよと言うかもしれないけれど、税金だってどう使われているか分からない。デンマークみたいにクリアな使い方ですべてが使われているわけではない。すると税金を取られるという感覚、納税拒否感、1円でも安い方がいい、これ以上払いたくないよ、と。安心して税金を政府に任せる、そういう方向になかなか日本では行かないんじゃないかな。

ではどうしたらいいのか。変えなければという動きも出てきている。先の参院選で令和新撰組の二人が当選したこととか、安保法制のときの学生の動きとか、政治を変えないといけないという動きもかなり出てきている。その辺りに光を見出したいなという気持ちでいる。

幸せな日本をつくるために何ができるかという、簡単にはいかないと思う。諦めてしまっただけでは何にも変わらないので、こういうお話をあちこちですて、1人1人ができることは大きな力ではなくても、共感する人を増やしていく。私たちは次の世代のために種を撒き続けることが大事だ。

寺田氏 デンマークでは、保育園の遠足でも園児たちが行きたい所を出し合い、話し合っ決めて行く。日本でもやってみれば変わるかもしれない。

久保氏 幸福度ランキングにしても統計から何を読み取るか、そこからどういう行動の指針を考えるかが大切。

茂木 江戸時代から日本人の中にはお上意識が在る。また名君が出て何とかしてくれないかという英雄待望論も在る。これを捨てなければいけない。自分たちで要求しなければ、誰かが私たちの生活を良くしてくれるなんていうことは決してない。勇気がいるかもしれないが、一人一人が投書なり SNS なり、発信し要求していくことが必要だ。

～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～

シンポジウムのコーディネーターは前田事務局長が担当しました。

参加者は54名。アンケートで寄せられたご意見はほとんどが「分り易かった」「デンマークについて知ることができた」と好評でした。時間不足でシンポジスト同士の意見交換、質疑応答ができなかったことへのご批判もいただきましたが全く同感です。

第2日夜はグループワークを行ない、第3日はその結果発表、意見交換をしました。その様子については紙数の都合で割愛します。理事長の年頭の辞からご推察いただければ幸いです。

エクセラン高等学校福祉科

デンマークへ研修旅行を実施

2019年11月12日から17日まで、松本市にある私立エクセラン高等学校福祉科の2年生8名が、ノアフュンホイスコール短期研修部で有意義な研修をしてきました。

【実施までの経緯】今から十数年前、あるツアー旅行で私と知り合ったGさんは同校の教務部長（後に校長、理事長）で、デンマークの福祉に関心を寄せられ、やがて当NPOに入会、同校で千葉理事長の講演会も開いて頂きました。福祉科の研修旅行をオーストラリアからデンマークへと変更した年パリの爆弾テロが勃発、断念の憂き目にあいました。昨年、福祉科の3年生が千葉さんの話を聞きたいと校長に直訴し実現しました。そのような流れの中で、ついに今回の研修旅行が実現しました。

【研修報告】参加者は12月2日に校内で成果を報告発表、その様子は翌日の信濃毎日新聞に掲載されました。また同7日には長野県総合教育センターで開催された「産業教育 MIRAI フェア 2019」のステージ発表（長野県内延べ14学科）でも発表しました。その内容をお伝えします。

◎医療・福祉・教育が無料であるが、デンマーク（以下Dk）人は無料と思っていない。原資が税金だからである。Dkは民主主義の国で、国は国民の声を大事にし、国民は政治に強い関心を持ち様々な制度に詳しい。福祉制度にも国民の意見がしっかり反映されている。

◎高齢者福祉に関して、Dkでは施設ではなく住居なので、各部屋に住所が付きポスト、インターホンがあって、24時間出入りが可能。日本の個室より広く私物を自由に持ち込める。トイレ、シャワー、キッチンが完備で、利用者やスタッフの負担軽減のために福祉用の器具を積極的に取り入れている。Dkでは全ての職業に資格があり資格が無いと働けない。高齢者施設のスタッフも全員有資格者で専門的知識・技術を持って

いるので、利用者は質の高いサービスを受けられる。日本の介護業界は人手不足だがDkでは充実していて、利用者的人数以上のスタッフがいる。

高齢者でも自分でできることは自分でしてもらう。利用者が決めたことに可能な限り対応する。たとえば日本では予め栄養士が考えた食事を提供するがDkでは利用者の希望に沿った食事を出す。利用者の思いに寄り添うことで、利用者が輝くような生活ができるようになっている。

◎知的障がい者の就労施設で作業体験。Dkでは障がい者年金で生活できるので食べるために働く必要はないが、生活を充実させるために働く。働く喜びや人間関係の構築など、得るものが多い。Dkはノーマリゼーションの考えが当たり前で、この施設も地域との関わり合いがあって成り立つ。

◎幼児福祉。幼稚園は日本と違い何でもやらせる教育方針。自分で決定し実行し失敗しても経験から学ぶことに価値を置く。民主主義の国なので幼い時から意思が尊重される。文字を教える事よりも集団生活でのコミュニケーション能力を学ぶことに重点。訪れた幼稚園は自然に囲まれ、子供たちは一日のほとんどを外で遊んでいた。酪農王国Dkでは幼時から自然の中で自然との付き合い方を学び、季節の変化から感性を磨き、様々な変化から想像力を養う。

◎Dkの制度をそのまま持ち込むことはできないが考え方を取り入れていきたい。福祉以前に政治に関心を持ち、税金について知らなければいけない。福祉を良くするために私たちも声をあげて行くことが大切だと学んだ。

◎デンマークはとても暖かい国でした。買い物で困っていると一緒にお金を確認してくれたり、つたない英語を聞き取ろうとしてくれたり、みんな優しい人ばかり。食べ物もおいしくきれいな景色も多い素敵な国でした。（文責：茂木俊郎）

2020年度総会は、同年5月23日（土）です。

例年会場として使用していた帝劇ビル地下の貸し会議室は閉鎖されましたので、新しい会場を探しております。4月の案内状でご確認ください。

編集後記 ★11月16日（株）チャレンジドジャパンとバンクミケルセン記念財団日本事務局の主催（当NPOと早大政策科学研究所が共催）で千葉理事長の叙勲祝賀会が開かれ、盛会であった。★災害列島と化したような日本、来年も同様な事態が続かぬことを祈る。★「悪貨は良貨を駆逐する」は政界にも当てはまるか。新閣僚たちのお粗末と任命権者の無責任。★海の向こうでは30代の女性首相、当方は男女平等指数121位の国、首相の掛け声は何だったの？★ともあれ2020年が一步でも「住み良い国」に近づくように頑張りましょう。（茂木）

発行所

〒292-0801

千葉県木更津市請西4-6-9

Tel & FAX : 0438-36-3565

お問合せ Tel : 090-9827-9262

茂木（もてき）俊郎

NPO法人ホームページ

<http://www.djsli.com>

メールマガジンの申し込みはホームページからお願いします。